たまぞの

第150号
令和５年３月１日発行
発行所／長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
TEL 095-824-5494
発行人／藤木　卓
印　刷／株式会社 岩永印刷所

母校の昔と今

現在の教育学部

平成17年頃の教育学部
（教育学部130周年記念誌より）

平成17年頃の教育学部（写真左）では，正面玄関は天文ドーム下の建屋１階にあり，玄関前に噴水のある池と，背の高い棕櫚の木が植えられていた。現在の教育学部（写真右）では，平成19～20年の改修の際に建屋左手に移された（写真中央植え込みのすぐ左手）。大学正門からは歩行者ゾーンが整備されるとともに，文教キャンパス外周の壁も中が見えるフェンスと芝生に改修されている。

長崎大学の今（前半）

長崎大学の今（後半）

長崎大学玉園同窓会
YouTubeチャンネル

巻頭言

国立学校設置法が公布された昭和24年（1949）に長崎大学が設置され，学芸学部として母校が再出発をした。そして，昭和25年に戦時中につき中止されていた，会報の第２号が発行されている。それ以来，今号で第150号に至っており，感慨深い。

そこで，会報の記念号として，『母校の昔と今』をテーマに掲げ，過去50年を遡り「私が教員になった頃」と題して，各年代の方々にご自身の実践や思い出を執筆いただくことにした。また，県外教員や，県内・県外の教職以外の方にも，「県外からこんにちは！」と，「私も，頑張っています！」と題して執筆いただくことにした。また，デジタル社会へ急激に変化する情勢を考慮して，今号より，会報初のフルカラー，横書きを採用した。これは，カラー写真・画像等の活用により，紙面の見やすさや読みやすさを意識したことによる。さらに，QRコードによるネット情報との接続にもチャレンジしている。初めて尽くしの会報であるが，同窓意識を核にした広報部会の情熱は，受け継がれているものと自負している。新しい「たまぞの」を，存分にお楽しみいただきたい。

（長崎大学玉園同窓会会長　藤木　卓）

私が教員になった頃

牛津 武聰（Ｓ43年卒・中学校）

出会いに感謝して

新任校で，「長崎でだれにも負けない技術・家庭科の力を付けなさい」という先輩教師から励ましの言葉がありました。きっと，日頃から教科指導に独り悩んでいる未熟な私を見かねてのことでしょう。

そこで，声をかけてくださったのが長崎大学卒の先輩を中心に作られた「エネルギー」という若手研究会でした。何か拠り所を求めたい一心で仲間に入れていただきました。「人はとかく怠けるもの，自分に課題を課して，努力するように追い込まねばならない」と，当時の先輩の言葉を思い出します。そのため，毎年のようにグループ研究委託を受けていました。柄にもなく個人研究委託まで受けたこともありました。とにかく教科の指導力を付けたいという皆さんの強い思いがいっぱいで，毎年研究授業をいたしました。その時は苦しい思いもありましたが，おかげで，その後の教員生活の礎になったと感謝しています。厳しい中にも家族ぐるみの忘年会は親睦の大切な行事として，最近まで続いていました。

平成16年，全日本中学校技術・家庭科研究大会長崎大会が開かれました。なんと，この時の大会運営委員長，実行委員長，要項編纂責任者，事務局長そして指導助言者には，かつての「エネルギー」最若手のメンバーがいました。この不思議な巡り合わせを考えるとき，改めて「エネルギー」を立ち上げ，鍛えてくださった先輩方に深く感謝申し上げるばかりです。

私は，縁あって，足掛け14年間社会教育に携わることになりました。地域の諸団体との連携を深め，自治会，PTA，育成協議会の役員など多くの地域オピニオンリーダーとの出会いがありました。青少年の育成のため地域で活動をしている皆さんがいることを知識では知っていました。しかし，多くの方がボランティアで献身的に活躍している姿を目の当たりにして学校教育ばかりが教育ではないことを身をもって学びました。当時の出会いと経験は学校現場に戻った時にどれほど役に立ったか計り知れません。

長い教員生活にはいろんな出会いがあります。仕事内容，勤務場所は思い通りに選べないことが多いようです。しかし，どんな状況に出会おうとも，どうにか解決の道は開けると信じます。そして，その出会いが自らの成長に繋がることは間違いありません。

どうか若い皆さんの前途に「あなた自身の花」を咲かせてください。

桑原 雄二（Ｓ53年卒・小学校）

初めての６年担任

私の教員生活は５年担任のほろ苦い経験から始まった。やさし過ぎ，教育経験ゼロの私にとって，高学年は早過ぎた。５年目にして初めて６年担任を任された。同時に，課外の男女ミニバスケットボールクラブの指導も引き受けた。誰かがしなければならない状況下で，素人ながら引き受けたのだ。もう新任の悪夢に怯むわけにはいかなかった。

一方，教師の本業もおろそかにはできなかった。放課後指導を終えてから，遅くまで翌日の授業準備をした。勤務校は伝統の研究校で，いつも夜遅くまで灯りが点いていたので“ちょうちん学校”とも呼ばれていた。土曜，日曜は練習試合に出かけたり，他校の指導者に学んだりした。そのうち指導ノートは３冊になった。クラブがだんだん軌道に乗り，結果が出てくるにつれて，学級も明るくまとまっていった。卒業が近づいたある日，「タイムカプセルを埋めたい」と子供たちから声が出た。私は嬉しくて同学年の足並みを乱してもそれを実現させた。小雪の降る校庭の隅で『春なのに』（当時ヒット曲）を，みんなで歌いながらカプセルを埋めた光景は今でも忘れられない。

それから30年後，思いがけない電話がきた。幹事さんから，カプセルの掘り出しと厄明けの会をするというのだ。私は喜んで参加の返事をした。

当日の朝，40名中20名と久しぶりの再会。みんなすっかり40歳代の中年になっていたが，当時の眼差しで名前と顔を一致させた。ところが，肝心のカプセルが，どこを掘っても見つからない。３時間以上が経ち，諦めかけた最後の一掘りで，ついに見つかった！中には，学級目標，未来の自分への手紙，筆箱，など無事に入っていた。みんなでひろげて当時を懐かしんだ。夜の会は当然盛り上がった。私には，どうしても尋ねたいことがあった。「あの頃の新米な私を，どうしてこの会に呼んだのかい？」すると，「あの頃の先生は，何でも一生懸命だったもんな。」ときた。子供たちは担任をよく見ていた。彼らには，教師の上手い下手は無用だった。私は，この子らの寛容さに支えられながら“共育”されていたのだ。私の大切な宝物である。

松本 結花（Ｈ５年卒・中学校）

子どもの頃からの夢であった教員として教壇に立ち，早や30年の月日が流れました。教員になったばかりの頃は，明日の授業はどうしようか，次の行事でどう学級を盛り立てていこうかと目の前のことに追われ，自分の未熟さを振り返る余裕もなく，先輩方に教えを請いながら，その日一日を終えることに懸命だった記憶しかありません。

そんな私が教員としての自分を振り返ることになった出来事は，一つは油木にある長崎市科学館へ異動したことでした。一緒に勤めたＯ先生，Ｍ先生はお二人とも理科の教員としての専門性とプロ意識の高い方々で，お二人と一緒に仕事をしていると，本当に自分には理科の教師としての武器がないことを痛感する日々でしたが，やるしかないと腹をくくり，お客様の前での実験ショーやプラネタリウムの解説などの業務に加え，特別展の企画や運営など，学校現場ではできないようなことにチャレンジさせていただきました。

もう一つは，初任者研修の拠点校指導教員として，初任者の方々に携わったことです。特にその当時は教員の採用数が少なく，大学を出て右も左もわからぬまま教師になった私と比べ，すでに数年間，臨採として学校現場を経験している初任者がほとんどで，彼らを見ていると，いたらない自分が恥ずかしくなることもありました。しかし，これまで自分が積み重ねてきたことを整理し，初任者の先生方に伝えていくという作業は，思った以上に自分自身を見つめ直すことができた日々でした。

どちらも教師になった頃には予測もしていなかった出来事でしたが，だからこそ自分自身を俯瞰して見つめられたような気がします。そして，この二つの経験は，自分自身の中で大きなプラスになっていることは間違いないと実感しています。

教員人生もすでに折り返しを過ぎました。これから更に10年後，今の自分に「おい，ちょっとは成長したぞ。」と言える自分でありたいと願っています。

園田 貴美子（Ｈ８年卒・中学校）

遠い遠い昔の記憶。私が初めて教壇に立ったのは平成８年４月。当時，生徒がとても元気だという市内でも有名な大規模校Ｍ中学校に赴任した。生徒数は約800名。23歳のまだまだひよっこの新米教師だった。生徒になめられまいと悪戦苦闘しながらがむしゃらに過ごした３年間だったことを思い出す。その後，市内でも超有名な，生徒がかなり元気のあるＫ中学校に転勤。飛び込みで学校一の元気な３年の担任を任された。毎日毎日，初任校と比べものにならないくらいの悪戦苦闘ぶりだった。当時，激太りの人生最大体重マックスの体型で生徒に変なあだ名をつけられたことを思い出す。そして，さらに６年後，町中にあるＳ中学校に転勤。更にとても元気な生徒の担任を２年間任される。寝ても覚めても仕事のことばかりを考え，時には，自分がこの仕事に向いてないのではないかと辞めたくなる時もあった。その後も，数校の学校に勤務させていただき，今に至っている。

そんな今，強く思うことがある。それは「教員になって良かった」ということ。思い返せば，もちろん，つらいことや苦しいことの方が多かったような気がする。でも，がむしゃらに一生懸命にやることで生徒からもらった感動や充実感のほうが遥かに今の私の大きな財産，そして生きる力となっている。

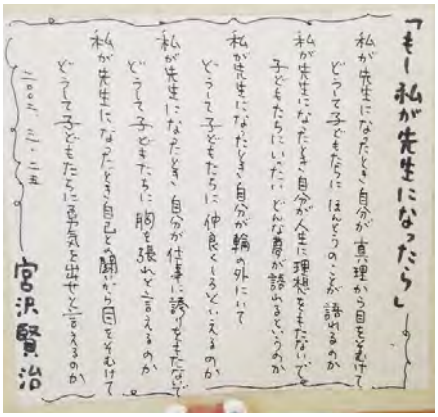
そして，出会った生徒が今では立派な人生を歩んでいるという話を聞くたびに自分のことのように嬉しく心が温かくなる。

うまくいかないことがあったときによく見ていた詩。この詩に励まされて，読むたびに奮起し，今までやってきた。今でも心に刻み込んで日々送っている。

「一期一会」一生に一度しかない，一つ一つの出会いを大事にこれからも頑張っていきたい。

悪戦苦闘しながら乗り越えてきた日々。ぶつかり合ったこともあったけど心は本当に優しくかわいい生徒。頼りになる，学ぶことが多かった先輩教師。一緒に頑張ってきた後輩教師。協力してくださった保護者や地域の方々。多くの人に出会い，支えられて，学ばせてもらい，成長させていただいた。本当に心から感謝している。

現在，教育界は，楽しい明るい話題より，そうではないマイナスのイメージがあろうかと思う。でも，今までの経験と，今，立場が変わり，見る角度を変えてみている教育世界は，そう捨てたものではないとこれからの若手教師，教職に就こうと悩んでいる人に言いたい。しかしながら自分の人生。楽しく人のために働ける職業を選ぶほうが良い。どの職業についたとしても，やる気と元気と笑顔があれば楽しい人生を送れると私は思っている。



赤山 大地（H24年卒・中学校）

私は今年度10年経過研を受けさせていただいており，節目の年度を過ごしています。初任からまだ10年なので，当時のことは鮮明に覚えています。初任校の３年間を一言で表すならば,「必死」でした。３月までは大学生であった私が,４月から突然「先生」と呼ばれ,自分の学級を持つわけですから大変です。自らを省みる余裕などなく，学級経営，教科指導，部活動指導で目が回りそうでした。当時の私の悩みは「生徒を叱ること」でした。生徒指導がうまくできなかったのです。当時悩んでいた私は「恐さが足りないのだろうか…」と考えることさえありました。しかし，現在はどうやって褒めるかに一生懸命な自分がいます。この10年間，生徒指導困難校に赴任することもありました。感じたのは，問題行動をする生徒の自己肯定感の低さです。一方で，昨年度から特別支援学級の担任を経験させていただき，適切な支援を受けることで，障害に関係なく自己肯定感をもって生き生きと輝く生徒の姿を見ています。この経験は，私の考え方を変えてくれました。10年前は生徒指導に不安を感じていましたが，今は褒める指導と支援に可能性を感じている自分がいます。

また，もう一つの悩みが教科指導でした。特に，最初の１年間は50分間を成立させることに一生懸命でした。睡眠時間を削って準備したにもかかわらず，生徒の反応に手ごたえを感じられず，後悔ばかりしていました。振り返ると，教材研究はしていたものの，生徒が見えていなかったのだと思います。この原稿を考えながら，教育実習生だった頃に参加した附属中学校の研究発表を思い出しました。その時,「理科の授業で大切なことは何ですか？」とアンケートがあり，参加した先生方の意見が掲示されていました。その中で覚えているのが,「愛」の一文字です。長大教育学部の教授が書かれたものでした。当時の私は，失礼ながら「面白いな」と思うだけでしたが，今考えるとこれは本質をとらえている気がします。理科の授業を通して何を伝えられるか，どう成長させられるか，今は楽しみながら授業をしていますが，その根底は常に愛情でありたいものです。

他の先生方から学ばせていただくばかりの10年間で，まだまだ経験も実力も足りませんが，これまでの経験と，今の考えを生かすことのできる次の10年間にしたいと考えている今日この頃です。

若松　優（H28年卒・小学校）

「どんな子どもたちとどんな楽しい毎日が過ごせるのだろう。」と胸を弾ませ，始まった教員生活。分からないこと，うまくいかないことの連続で，とにかく必死に過ごす毎日でした。

その中でも，特に私にとって大切な出来事は，11月18日，一部の子どもの自己中心的な行動が目立つなど学級づくりに頭を抱えていた時期に起きました。その行動に対して，今まで見て見ぬふりをしていた多くの子どもたちが「そんな行動はやめてほしい，おかしいと思う！」「先生，話し合う時間をください。」と声をあげ，お互いに意見をぶつけ合うという出来事でした。私は,「学級のルールを徹底させられなかったことが原因だ。子どもたちの仲を悪くさせてしまったかもしれない。これからどうしよう。」と後悔と不安でいっぱいになりました。しかし,「この出来事は嬉しいチャンスだよ！」と指導の先生に励ましてもらい，気持ちを切り替え，問題解決に挑むことにしました。１日かけて，子どもたちからしっかり話を聞き，クラスみんなでこの問題やこれからについてじっくり話し合いました。クラスの約束事を決め，みんなで決めポーズをしてこの日を終えました。この日を境に，子どもたちの様子が変わりました。授業以外の場面でもお互いの気持ちを素直に伝え合い，クラスでの取り組みに前向きになりました。11月18日はクラスにとって大切な記念日になりました。

あの頃から６年が過ぎ,教員７年目になりました。今，考えるとこの出来事をはじめとして，子どもたちに助けられたことがたくさんありました。今も，楽しいことうまくいかないこともいっぱいの試行錯誤の毎日ですが，必死に踏ん張ったあの初任の日々が，どんな時も「頑張れ！」と私の背中を押してくれているように思います。当時，信じてついてきてくれた子どもたちや，周囲の先生方がかけてくれた言葉を胸に，これからも，目標に向かって頑張っていきたいと思います。

県外から、こんにちは！

坂田 仁志（S 53年卒・小学校）

大学を卒業して，益田市内の小学校に10年間，中学校に28年間勤めた後，今は地元の益田東高校に勤務しています。高校に勤めて，小学校や中学校指導の大切さと難しさを改めて感じているところです。現在は生徒募集や教員募集，野球やサッカーのチーム訪問，進学先の大学訪問等で県外へも度々出かけています。ま

た，寄宿舎運営，体験入学会，入試業務，進学就職指導等もあり，地方での私学経営はなかなか大変です。そんな中でも，各種大会には選手と同じユニフォームで駆けつけ，応援を楽しんでいます。

長崎大学在学中は，友人，先輩，後輩，先生方に恵まれて最高に楽しい４年間でした。今でも，多くの顔を思い浮かべては数々の思い出を懐かしんでいます。現役を引退された同級生も多いと思いますが，無理をされずに元気でお過ごしください。私も高校生から若いエネルギーを分けてもらいながら，もうしばらく頑張ってみようかなと思っています。母校，同窓会のご発展を心からお祈りします。

猪股 清貴（S 59年卒・中学校）

大学を卒業してすぐに福岡県糟屋郡の中学校に国語の教師として赴任しました。それから38年，令和４年３月に無事定年を迎えることができました。勤務した学校は延べ９校，教諭として22年，管理職として６年，指導行政に10年お世話になりました。この間，同じ長大出身の先生方にもお世話になりました。特に印象に残った３人の先生方を紹介します。

一人は同じ教育事務所で指導主事として働いた同僚の小学校の先生です。彼は現在教職大学院の助教授として活躍しています。もう一人は校長先生とし

てご指導いただいた先生です。名校長として皆からの尊敬を集めていらっしゃいました。そして，３人目は，赴任先の教育委員会の教育長をなさっていた方です。同じ長大出身というだけで，心強く誇りに思いながら仕事をさせていただきました。私も４月から町の教育長として再出発しています。同じ役場の総務課にも同窓の優秀な課長補佐がいます。玉園同窓会が今後ますます発展されますことを福岡の地から祈っております。

私も頑張っています！

藤岡 英嗣（H 13年卒・民間企業）

2000年に教育学部を卒業し，2002年に大学院教育学研究科を修了して20年。私は地元のケーブルテレビ会社「長崎ケーブルメディア」で働いています。業務は撮影編集など制作全般。現在，番組５本を抱える中堅の番組制作者です。大学を卒業するとき私は，教師になるかカメラマンになるかの選択を行いました。多くの同級生が教師としての道を選ぶ中，民間企業で働くことを決意し，その仕事が天職となり今に至ります。仕事では小中学校や高校・大学に行き様々な取材をすることがあります。その度に自

分が教師になっていたらどんな人生だったのだろうかと想像し，いい先生になっているイメージができぬまま，今の仕事で良かったのだと言い聞かせています。大学から院までの６年間で多くの事を学び，成長しました。その学びは今の仕事の糧となっています。2019年には長崎大学水産学部の研究室と共にマッコウクジラを追いかけ４Ｋ番組を制作し，様々な賞を頂くこともできました。長崎大学は母校であり，今でも大切な学びの場となっています。

徳永 夢子（H 19年卒・民間企業）

情報文化教育課程情報メディアコースを卒業してから，16年が経とうとしています。卒業後はグループウェアを取り扱う企業に就職し，開発部門で仕事をしています。オンラインでの情報共有を促進し，「チームの力を発揮しやすい環境が作れるように」「場所や時間を選択しながら働くことができるように」という思いで業務に携わっています。教育学部時代は遠隔授業の技術サポートとして釜山大学や福岡県の小学校へ同行させていただき，“情報技術で教育の場を支援する”ということを肌で感じました。情報技術の活用によって課題解決にチャレンジする体験は，わたしにとって貴重なものになりました。

在宅で勤務しながら，午前中に１時間だけ小学校へ出向き，こどもの持久走大会の応援をする。この生活も，様々な情報技術で課題をクリアし成立しています。

このような価値を増やし，わたしたちやこどもたちの豊かな生活につながるように，わたしの立場でやれることを実践していこうと思います。

教採セミナーに参加して

田坂 優衣（小学校教育コース）

対策講座が始まるまでは，不安なこともたくさんありましたが，玉園の先生方が面接の入室方法や姿勢，話し方など一つ一つ丁寧に教えてくださり，私たちの疑問や不安に寄り添いながら指導してくださるので，少しずつ自信がついてきました。玉園の先生方は，実際に学校教育に携わられていた方々ばかりで，具体的なアドバイスをしてくださり，この講座を通して私自身，自分の考えや教育観と向き合い，成長することができました。また，講座の練習は，１対１ではなく，グループで行われたことで，他の学生からの学びもあり，刺激をもらっていました。私は，毎回，「今日はここをしっかり伝えよう」「長くなりすぎないように大きな声で話そう」など自分の目標を決めながら参加していました。

講座は，毎日３回の時間に分けて開講され，みてくださる先生方が毎回違うので，時間がある日はできるだけ多く参加し，様々な先生方にみてもらい，アドバイスをいただいたことで自信に繋がりました。そして，２次試験では，この講座を通して教えていただいたことや学んだことを振り返りながら，本番の面接に挑むことができ，合格することができました。私は，面接練習を通して自分がなりたい教師像，自分の芯をしっかりもつことができ，普段から自分の意見を相手に分かりやすく伝えることを意識するようになりました。

本番では，想定外の質問もありましたが，面接練習も毎回同じ質問ではないので，本番で想定外の質問をされたときも面接練習を通して自分が思い描く教師像や芯を築くことができていたので落ち着いて答えることができました。初めから完璧にできる人はいないので，繰り返し参加して，たくさんのアドバイスと他の学生の姿を見ながら，なりたい教師像を具体的にしていくことが自信にも繋がると思います。

田中 真美子（小学校教育コース）

現場での豊富な経験をもとに，一人一人に応じたきめ細かな指導をしてくださるので，とてもありがたかったです。

面接では，練習を重ねるごとに少しずつ自分の考えがまとまっていくことを実感しました。簡潔に，自分の言葉で伝えたいことを相手に伝えることは難しいですが，練習すればするだけ上手になると感じました。面接質問に対して，自分だったらこう答えるという先生方の意見も聞くことができ，とても勉強になりました。

また，毎回本番さながらの緊張感を感じることができるため，日々成長していくことができたと思います。一つ一つ丁寧に助言をし，たくさん褒めてくださるので，少しずつ不安は消えていき，自分に自信をつけることができました。

練習の合間には，教職の魅力についてたくさんお話を聞くことができ，教師を目指す意欲がどんどん強くなっていきました。また，県外受験であっても，その県の試験内容や傾向に沿った対策をしてくださるので，受験する県に関係なく，全員で一つの目標に向かって努力し，お互い高め合うことができました。

本番は，とても緊張しましたが，これまで指導してくださった先生方の顔が浮かんできて，自信を持って試験に臨むことができました。練習で聞かれた質問もあり，堂々と答えることができました。そのおかげで，私は，長崎県の教員採用試験に合格することができました。春から，小学校の先生として教壇に立ちます。不安なことはたくさんありますが，子どもたちとの出会いがとても楽しみです。ご指導してくださった先生方に恩返しができるように，長崎県の教員としての自覚と誇りを持ち，精一杯努力を積み重ねていきます。

立岡 あずみ（特別支援教育コース）

私はほぼ毎日，玉園同窓会が行う教員採用試験対策に参加しました。主に面接カードや面接を指導していただきました。面接カードでは繰り返し添削していただく中で，設問に対して自分の考えの軸ができ，バラバラだった考えがまとまっていく感覚を実感できました。先生方が親身になって私たちの話を聞いてくださったり考えを引き出してくださったりしたおかげで，自分自身の教員を志望する意志やなりたい教員像などを再確認することもできました。また，先生方が教員時代の経験を話してくださったことで，新しい教育観をもつこともできました。面接練習では繰り返し練習をしていただくことで場慣れすることができました。初めは面接に対して不安な気持ちが大きかったのですが，話し方や内容についてさまざまなアドバイスをいただき，自信をつけることができました。このような前向きな取り組みにより，本番の教員採用試験で良い結果が得られるよう，玉園同窓会で学んだことや経験を活かし全力で臨みたいと考えたことが思い出されます。

以上のような取り組みにより，念願の教員採用試験に合格し，来年度から長崎県内の特別支援学校で教員として働くことになりました。

これからは，様々な困難もあるとは思いますが，私の理想である「優しさや厳しさをもって接し，子どもから愛される教師」を目指して日々挑戦しながら頑張っていきたいと思います。

母校だより

「たまぞの」が記念すべき150号を発行されるとのこと，まずは教育学部を代表してお祝いを申し上げます。本学部も2024年には150周年を迎えますが，これまでを振り返ると時代の要請に応じて優秀な社会人を輩出してきました。最近では，教員就職率を見ると平成20年の46.1％を底として，令和３年度には大量採用時代もあり67.6％（保育士就職率5.7％，大学院進学率5.7％を除く）と，大きく改善しています。一方で，全国的には12月19日の中央教育審議会答申に見られるように，国立の教員養成大学・学部が45大学まで低下する中で，小学校免許の教職課程を有する大学数は249と，この10年間で私立大学による設置が３割も増加し，教員養成学部にとっては厳しい時代と言えます。

そこで本大学としては，少子高齢化や2030年以降を見据えた学力観の変更を受けた取組みとして，学部定員を令和２年度より180名に縮減し，中学校の技能系教科（音楽，美術，技術，家庭）の募集を停止するといった小学校を中心とした教員養成にシフトしました。これに対して，長崎県内の地域別教員配置は，教員の大量退職と採用者の都市部地域への主勤務地希望もあり，過疎地域での減少傾向が顕著になっています。学校が地域の文化を支える拠点の一つであることを考えると，地域に持続的な社会を創るためには，ふるさとで優れた教員と共に地域から学べる環境の整備と，本学で志を実現できるような学びや人の循環システムを構築することが必須と言えます。

本学部の卒業生を見ると，2001年に『聖水』で芥川賞受賞された小説家のペンネーム青来有一さん，漫画家のペンネーム紫堂恭子さん，作曲家の得田真裕さんや，最近ではコロナ禍で活動を制限されながらも卒業後にアーティストとして活躍している浦小雪さんなど多くの方がおられます。また，本同窓会長の藤木卓さんも本学部を卒業後，長崎県の中学校教諭を経て，大学人として活躍されました。これらの事例は，ご本人の頑張りが主ではありますが，本学での学びも大きく影響を与えていると思います。

本学部が地域や社会から信頼されるためには学生自身と社会の夢が実現できる教育体制や，地域社会と繋がり学校・社会教育が支えられる体制を整備すること，また本学の理念である平和の実現に向けた教育・研究が必要です。同窓生の皆様には，学部の進化・発展にお力添えをお願いいたします。

（教育学部長　藤本　登）

事務局だより

公益目的事業の募集

本会は，公益目的事業として，長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成，及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。

【図書購入費助成事業】

１．助 成 校：本県内，小・中・高・特支の各学校
２．助 成 額：１校につき５万円未満（５件程度）
３．募集期間：令和５年３月１日～６月30日
４．応募手続き
　①助成希望学校は本会事務局へ連絡
　②希望校へ募集要項を送付
　③希望校は申込書及び購入図書計画書を提出
　④選考後，決定通知を送付
　※応募先（本会事務局）
　　Email : inf@tamazono.net
　　Tel.&Fax. 095-827-5494

【児童・青少年健全育成助成事業】

１．対象事業
　①児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化継承・社会貢献等の実践活動
　②健全育成を目的として実施する，保護者・地域の指導者等の研修，学習活動
２．助成額：１件当たり５万円を上限として，総額20万円の範囲内で，対象とする事業の必要経費の概ね1/2を限度
３．募集期間：令和５年４月１日～６月30日
４．応募手続き
　①助成希望団体（希望団体）は事務局へ連絡
　②希望団体へ，募集要項を送付
　③希望団体は，申込書及び実施計画書を提出
　④選考後，決定通知を送付
　※応募先（本会事務局）
　　図書購入費助成と同じ

長い間、ご苦労様でした。

本年度，10年以上本会の屋台骨を支えていただいた，濵崎嘉一郎会長，野中元則常務理事(事務局長)，尾崎俊輔幹事のお三方が退任されました。濵崎会長は理事，副会長，会長職を10年以上にわたり，歴任されました。退会に当たり，ご挨拶が，会報149号に掲載されていますのでご高覧ください。野中常務理事は，県校長会，教育会を経て，本会の事務局を長年支えていただき，後年は常務理事（事務局長）として，会の発展に，真摯に努めていただきました。尾崎幹事は，退職後まもなくから十数年にわたり勤務いただき，多くの先生方のご支援を得ながら，年２回の会報誌の発行業務にご尽力くださいました。お三方ともに得難い業績を残していただきましたが，ご高齢により惜しまれながらのご退任となりました。今後ますますご健勝にて，会の将来を見守り，ご支援をお願いできればと思います。

事務局は，後任として，会報149号にてご挨拶いただきました藤木卓会長（長崎大学教授）と，青嶋秋男理事及び江口洋常務理事の３人体制となります。藤木会長，青嶋理事は新任とは言え，若さと情熱をもって，会の運営に新風を吹き込み，熱意をもって携わっていただけるものと期待してください。

（長崎大学玉園同窓会常務理事　江口　洋）

お知らせ

ともに，終身会員として

今年３月でご勇退される同窓会員の皆様，永きにわたるご貢献，本当にご苦労様でした。本同窓会では，退職後も終身会員として，本会の進展にご支援いただければと思っています。本会の全ての事業は会費収入により賄われています。ぜひ，終身会員へご登録ください。よろしくお願いいたします。

※終身会費 5,000円（登録時１回のみ）
　支払いは郵便払込でお願いします。
　事務局まで用紙をご請求ください。

本会報を読んでのご意見・ご感想をお聞かせください。

玉園同窓会ホームページ
https://tamazono.net/

玉園同窓会
YouTubeチャンネル

事務局へのご連絡

・電子メール：inf@tamazono.net（常時）
・電話：095-824-5494（以下の時間帯）
　曜日：火曜日，水曜日，金曜日
　時間：10時～15時
※不定期にお休みすることがあります。

題字：青嶋秋男